



舞闘会の華麗なる終演

暁の天使たち 外伝 1

茅田砂胡

Sunako Kayata



立ち読み
専用



D 挿 口
T 画 絵
P

ハ 鈴
ン 木
ズ ・ 理
ミ ケ 華



の 舞闘会の華麗なる終演 目次 の

嵐の後 5

宇宙一不幸な男 159

嵐の後



1

脇腹から滲む血を掌で押さえながら、ルウは隣に横たわる人を見つめて問いかけた。

「エディ、立てる？」

「……なんとかな」

リイは傍目にも顔色が悪く、ぐったりしていた。

無理もなかった。呼吸も心臓も停止した状態から蘇生したばかりなのだ。ルウに負けず劣らず急いで治療を受けて、十分な休養を取る必要があるのは明らかだったが、今はそうもしていられなかった。

彼らのいる《ダイダロス・ワン》が崩壊の危機に瀕していたからだ。

イカロスVは既に正常に機能しているとはいいたがたい状態にあり、構造物自体にも致命的な損害を受けたと見えていい。

ルウが理性を取り戻したことで宇宙嵐は止んだが、それまでに受けた被害が大きすぎたのだ。

それを裏付けるものはさつきからひっきりなしに繰り返されている自動機械による警告だった。

基地内に異常が起きたことを告げ、職員に至急の避難を勧告するものだ。

「急いでここから逃げないと。この基地、あんまり長く保たない」

「わかってる。問題はすんなり逃げられるかだ」

「まさか、さつきの連中がまた来るんですか？」

意外そうに尋ねたのはシエラだった。

この人たちが眼を覚ましたからにはガイアの言う『悪しきものたち』など何も手出しできないはずと思っていたが、ルウが首を振った。

「その扉を一步出れば、多分、うじゃうじゃいるよ。」

——ここはまだ彼らの世界の中だし、今なら目的を達成するのに絶好の機会だからね」

ルウは床に座ったまま、さつき取り落とした剣を拾い上げて鞘さやに戻し、シエラを見て言った。

「彼らと闘った？」

「はい」

「強かった？」

「いいえ。雑魚ぞこばかりです。先程この室内に現れた男だけは少しばかり手強そうでしたが、何もせず逃げ帰ってしまいました」

「じゃあ、当てにしている？」

「は？」

「ぼくたちがここから逃げるためには、どうしてもきみの助けが必要なんだ。当てにしているかな？」

「もちろんです」

力強く頷うなずいた。

リイも同じことを言った。

『おまえが迎えに来てくれ』と『おれたちを助けて

くれ』と『当てにして待っている』と言ったのだ。

その指示がまだ中途ならば、まだ助かったことになっていないというのならば、この人たちを無事に連れ帰るのが今の自分の使命だった。

「そっちの二人も、お願いできる？」

ヴァンツァーは黙っていたが、レティシアは肩をすくめた。

「だから、王妃さんもおまえもなんだってこっちを巻き込むんだよ。そんな必要はねえだろう。来た時みたいに魔法で帰ればすむことじゃねえか」

「無理だな……」

レティシアの疑問に答えたのはリイだった。

深い息を吐きながら鈍い動きで身体を起こそうとするのを、シエラははらはらしながら見守っていた。手を貸したいのはやまやまだが、この人はどんな時だろうと人の手を借りたりしない。そんなことをしていいものかどうか躊躇ちゅうちよしたのだ。

リイはあの指輪を左手に戻しながら言った。

「状況が全然違う。さつきまでは非常事態だった。

だから、おれには魔法を使うことが許されていた。

今は違う。ルーファは正気なんだから。おれたちは自分の足で安全な場所まで戻らなきゃならない」

「言っとくけど、ぼくはもともと正気だよ。ただ、

さつきまでは太陽を吹っ飛ばそうと思っていただけ、今はその気がなくなつたつていうだけだ」

そんな物騒なことを真面目に言う相棒に、リイは声を立てて笑つた。

「なくなつてくれてよかったよ」

しかし、その声には力がない。

「リイ。この場合の安全な場所とはどこです？」

「とりあえず、ケリーの船だ——そうだな？」

「そうだよ。正確にはこの基地の昇降口までだ」

ルウが言う。

「そこまで行けば圏外に出られる。今はまだ、この部屋の外は彼らの世界だ。協定があるからガイアも手を出すことはできない。もともと彼らにしたつて、

ぼくが呼び寄せたようなものだからね……」

「それは言つても始まらない。おれたちがここから抜け出せば済むことだ」

リイが言つて、かろうじて自分の足で立つたが、普段のこの人を知っているシエラには信じられないくらい重たそうな動きだった。床に転がった自分の剣を拾い上げる動作さえだるそうだった。

「リイ……」

大丈夫ですかと言いかけた声をシエラは無理やり呑み込んだ。

大丈夫でないのはどう見ても明らかだったからだ。ルウと違って肉体的な外傷はどこにもないのに、今のこの人はルウ以上に深い傷を負っている。

リイ自身、それはわかつていっているらしい。

泣きそうな顔のシエラを見やつて苦笑した。

「隠しても始まらないからな。正直に言うが、今のおれはまったくの役立たずだ。当てにはするなよ」
どうしてかとは訊けなかった。

訊かなくてもわかるような気がしたからだ。

リイはさらに黒装束の他の二人を見て言った。

「様はないが、見ての通りだ。今のおれを殺すのは、おまえたちなら指一本で事足りるだろうな」

「だけど本当にはやらないでね」

ルウが心配そうに、レティシアとヴァンツァーに念を押してくる。

どこまで本気なのかさっぱりわからない人だが、急がなければならぬことだけは確かだった。

貴賓室を襲う振動は徐々に激しさを増している。

脱出口の扉に眼をやると、シエラはレティシアを振り返って言った。

「わたしが先に行く。その人を頼む」

猫の眼が笑って言い返してくる。

「頼む相手が違うんじゃないかねえのか？」

「おまえがわたしより遥かに強いのはわかっている。ならば、おまえに任せるのが適任だろう」

負傷したルウの傍には無言のヴァンツァーが付き、

それを確かめたシエラは無造作に扉を開けた。

この扉の向こうにどんな世界が広がっているかと、どんな敵が待ちかまえていようとかまわなかった。

蹴散らして押し通るまでだ。

景色は入ってきた時と何も変わらなかった。

別に想像を絶するような異世界の風景が広がっていたわけではない。だが、そこには撃退したはずの兵士たちがずらりと揃っていた。手に手に剣を構え、槍を構え、見たことのない弓矢を構え、その矢先はすべてシエラに向けられていたのである。

「退け、人間！ この異境で死にたいか！」

「ここはおまえたちの属する世界ではない。邪魔はせぬことだ。さもなくばおまえたちは遺骸も残さず消滅することになるぞ！」

口々に言ったが、シエラはびくともしなかった。

相手の人数と武器、配置を素早く確認した。

全員が同じ床の上に立っている。

魔法を使えば天井に立つことも可能はずだが、

そういう者は一人もない。つまり地上での戦闘で敵を前にした時と条件は同じということだ。

冷たく言い返した。

「その人間に無様に倒されなければ貴様らこそ道を開ける、下郎」

言い終わらないうちにシエラは飛び出した。

その背中を援護するようにレティシアの指先から触れる者すべてを分断する銀の糸が奔る。

ヴァンツァーの手から空を切って必殺の礫が飛ぶ。

飛び交う矢をかくぐり、繰り出される槍や剣のことごとくを躲して、あつという間に数人を倒したシエラを見て、ルウが感心したように言った。

「あの子、なんか人間変わってない？」

「おまえにだけは言われたくねえと思うぜ」

レティシアが真顔で指摘する。

敵はじりつと引き下がったが、今度は逃げない。

その敵の眼はすべてルウに集中していた。

飢えて凶暴な野犬の群れが獲物を見る時のような、

激しい熱を帯びた狂おしいような眼の光だ。

「それを！」

「寄こせ！ それはもともと我らのものだ！」

それというのがルウのことだと察して、シエラの怒りに新たな火が点いた。雑兵の分際で何を戯言を抜かすかと心の中で罵ったが、ルウは違った。

リイに斬られた傷は未だに癒えず、生々しく血を滴らせているのに、にっこりと笑ってみせた。

「ぼくが欲しい？」

たおやかで艶めかしい、しかし、見る者が見ればぞつと震え上がるに違いない壮絶な笑顔だった。

「そんなに欲しいのなら取りに来れば？」

武装した敵はいきり立った。人間ではないという兵士たちがルウめがけて殺到する。

ヴァンツァーが舌打ちしてルウの前に進み出た。

その両手が眼にも止まらぬ早さで動いたと思うと、片手に余る兵士たちが一斉に悲鳴を發して倒れる。

一兵も寄せ付けない見事な攻撃だった。その上で、

ヴァンツァーは後ろのルウに文句を言った。

「むやみに挑発するな」

「このほうが手っ取り早いでしょ」

前戦で戦いながらシエラは思わず笑みを浮かべた。奇妙な図だった。自分がリイとルウを背中を守り、レティシアとヴァンツァーと共同戦線を張っている。それにしても彼らの技の冴えは見事だった。

シエラも彼らも暗殺を生業とする一族の出身だが、シエラはこうした正面切つての勝負は苦手だった。苦手というより、リイの傍で闘うようになるまでやったことがなかったのだが、彼らは違う。

同じ一族のはずなのに桁違いに場慣れしている。

この際それがありがたかった。派手に暴れて敵を引きつけるという自分の役目に専念できるからだ。

敵が怯んだ隙を見て、ルウが言った。

「シエラ、こっち。ここが通れる」

振り返ってみるとルウは通路の壁を指さしていた。まさかと思っていると、リイが真っ先にその壁に

飛び込んだ。それを見たレティシアも後に続く。

ヴァンツァーとルウも同じ壁をめがけて飛び込み、最後にシエラが飛び込んだ。

暗い洞窟を一瞬でぐぐり抜けたような感覚の後、来た時には通らなかつた場所に出た。

四方を壁に囲まれている。格納庫のようだった。

見た目は《ダイダロス・ワン》の通路でも、今は違うものになっているらしい。本来通れるところが通れず、通れないところが通れるようになっている。ルウにはその道が見えるらしいが、それは敵兵も同じことだ。もともとここは彼らの世界なのである。ルウが次の入り口を探している間にも、空中から次々に敵が出現した。

「逃がすか！」

「死ね！」

高みから飛び降りる格好で襲い掛かってきた。

他の者が相手なら奇襲に成功していただろうが、今回は無駄なことだ。シエラはもちろん、一族でも

腕利きだったレティシアとヴァンツァーが冷静さを欠いた敵など寄せ付けるわけがない。

片っ端から撃ち落とした。

とはいふものの、これではきりがない。

何と言つても多勢に無勢だ。

おまけに、本来なら二十人分の働きをするはずのリーとルウが今はろくに動けないときている。

ひっきりなしに戦い続けたシェラの呼吸は激しく乱れ、手持ちの鉛玉を打ち尽くしたヴァンツァーが初めて腰の剣を抜いて構えた。

レティシアの操る銀線も切れ味が鈍りつつある。無理もない。彼はさつきから敵の手足や首などを数え切れないほど切り落としているのである。

こちらにも銀線を捨てて愛用の小太刀こたちを構えたが、倒しても倒しても敵の数は一向に減る様子がない。額の汗ひたひたを拭いながらルウが言った。

「分が悪いね。ここは彼らの縄張りだ」

「どうすればいいんです?」

「待つて。今探してる」

ルウの眼には自分たちには見えないものが見える。視線をさまよわせていたかと思うと、遠く離れた壁を指し示した。

「あっちだ」

しかし、そう簡単にそこまでは行けなかった。敵が躍起やどきになつて行かせまいとしたせいもあるが、傷を負ったルウの動きは予想以上に鈍い。

それ以上にリーの動きが鈍かった。信じられないことに足をもつれさせて倒れそうになつたのだ。

シェラは仰天ぎょうてんした。こんな時でなければ悲鳴を発していたに違いないが、近くにいたレティシアがそんなリーの腕を掴つかんで支えたのである。

「面倒くせえ」

業を煮やした調子で言うと、レティシアはリーの腕を自分の肩に回して抱えるように走り出した。

リーがちよつと笑つて言う。

「世話を掛けるな」

「まったくだ。——貸しにしとくぜ」

シエラはますます度肝^{どぎも}を抜かれた。

目の前の光景が信じられなくて、闘うのも忘れて茫然^{ぼうぜん}と突っ立っていた——と自分では思っていたが、我に返った時は周囲に死体の山ができていたから、実際にはちゃんと殺気に反応して片っ端から敵兵を薙^なぎ倒していたらしい。

我ながらいつの間にと思いつながら、シエラも足を速めて他の顔ぶれに追いついた。

ルウは格納庫の行き止まりの壁のあちこちに手をかざしている。

リイはその傍の壁に背をもたせて、剣先で身体を支えるようにして息を荒くしている。

「あつた！」

ルウが言い、リイを抱きかかえるようにして壁に開いた『道』に飛び込んだ。

もちろんシエラたちも後に続いた。

壁を通り抜けると、そこはもう船の発着場だった。

二重扉の向こうに彼らのよく知る宇宙が見える。

さつきまでは大時化^{おおしけ}の海のように荒れていたが、今は風^ないでいるのがわかる。無数の星が輝き、嵐の名残^{なごり}なのか多数の小惑星が流れていくのが見えた。

ルウは発着場には必ず設置されている通信端末を起動させて呼びかけた。

「キング、聞こえる？」

すぐに答えが返ってきた。

「天使!? 無事か！」

「今どこ？」

「そっちへ向かっているとこだ！」

「お願い、急いで」

ルウが言って通信を切る。

その途端だった。

「ありゃ？」

身体の変変に気づいたレティシアが少々間抜けな声を発した。ヴァンツァーも眼を見張った。

二十代半ばの『本来の』年齢に戻っていた身体が、

また突如として少年に変じてしまったのである。

何故か剣だけは手元にあるが、衣服も元通りだ。

シェラも同じだった。急に小さくなった手に驚き、無意識に他の二人の姿を確認することでそれを知り、ファロット一族の三人は互いの顔を見合わせた。

「時間切れか？」

「いいや、この場合は魔法の効力が解けたと考えるべきだろう」

彼らばかりではない。リイも元の十三歳の少年に戻っていた。しかし、額の銀環と剣はそのままだ。

ぐったりと壁にもたれて身体を支えている。

シェラは今度こそリイの傍に急いで、力を失ったその身体を支えようとした。

それは本来、自分の役目であるはずだった。

自分の力不足を自覚していても、レティシアにも他の誰にも、本当はこの人を任せるのはいやだった。だが、安心するのはまだ早すぎた。

船の到着を待つ彼らの前に、あの男が現れたのだ。

貴賓室のシェラたちの前に現れて、不思議な光に追い払われて消えたはずのあの男だ。

シェラは咄嗟とっさに身構えたが、ルウがそれを制してのんびりと言った。

「何をしてるのかな？ きみたちが何の理由もなくこちら側に出て来るのは協定に反するはずだよ」

男は固い声で言った。

「一緒に来てもらおう」

「お断り」

「今はもう銀の月の力は当てにできぬ。白い太陽も動けない。従うより他におまえに道はない」
グリーンディエタ

「勝手に決めないでくれる？ そんなこと。ぼくは行かない」

「あまり我らを困らせるな。どうしても、いやだといふのであれば……」

「どうするのかな？」

ルウは少しも動じなかった。

その口調はおもしろがってさえいるようだった。

「力づくで連れていく?」

「必要とあらば」

「それは助かる。ぜひやってくれる?」

「……………」

「力を使えない条件は同じだなんて言わないでよね。そっちに攻撃されれば、ぼくには大義名分ができる。堂々と力を行使して、危害を加えるものを撃退することができる。——知らないわけじゃないでしょ」

呆れたようにレティシアが言った。

「何だよ、魔法は使えないんじゃないのか?」

「だったらさっさとやれよという言葉まで聞こえてきそうだったが、ルウは首を振った。」

「あいにく、条件が厳しくてね。簡単にはいかない。」

「ただし、攻撃されたら身を守る権利くらいはある」

「今までだって派手に攻撃されてただろうが」

「いろいろ面倒な決まりがあるんだよ。剣には剣を、魔法には魔法をもつて応じるといいうのもその一つだ。」

「彼らは剣で攻撃してきた。本当ならこっちもそれで」

「応戦しなきゃならない。だけど、今のぼくたちには無理だから、きみたちにやってもらった」

謎の男に視線を向けて、ルウはちよつと笑った。

「この人の攻撃はそんな生やさしいもんじゃない。」

「間違いない魔法の一撃が来る。ただし、その瞬間、ぼくには同じ力を使って応戦する権利が与えられる。あとはどちらの力がより強いかで勝負が決まるけど、試してみる? 試すまでもないと思うけどね」

男はこの言葉に真顔で頷いた。

「わかっているとも。だからおまえを攻撃はしない。グリーンディエタを狙うこともしない。わたしはただ、人のつくったこの建造物を砕くだけだ」

「……………」

「人間どもの言う真空に放り出されたら、おまえはともかく他の者は生きてはいまい。直接の攻撃ではないのだから、おまえには力の解放は許されない。」

「グリーンディエタを見殺しにするのか?」

「シエラは息を飲んでルウとその男を見比べた。」



リイもルウも気軽に使っているように見えたので、まさか魔法というものにこれほど厳しい使用制限があるとは思ってもみなかったのだ。

ルウは無表情で沈黙している。その沈黙の重さが事態の難しさを如実に表しているようで、ますます声が出なくなつた。

その代わりにリイが荒い声で言つたのである。

「やってみろよ。やれるものならな」

男はリイに眼を移して苛立たしげに言つた。

「そんなに死にたいか？」

これに対してリイは低く笑つたのである。

「死にたいと思つたことは一度もないが、おれはな、いつどこで死んだってかまわないんだ。ルーファが泣くのがいやだから生きているだけだ」

「単なる脅しだと侮つてゐるなら、考え直すことだ。ルーファセルミイを手に入れるためなら、わたしは

——我々はどんなことでもする」

「あいにくおまえの言うことは脅しになっていない。

おれが今ここで死んでみる。原因が何であろうと、おまえがおれを殺したのだとルーファは判断するぞ。それでもいいのか？」

男は唇の端を歪めて笑つた。

「大いに結構。我らはそれでもよいのだ。おまえを失つたルーファセルミイが暴走を開始すれば我々の目的は達成される」

「この世界ごと邪魔なラー一族を一掃できるとも言うつもりなら、おまえたちは底抜けの大馬鹿だぞ。そうなつた時のルーファにこの世界もおまえたちの世界も区別なんかつくとするか。丸ごと一緒くたにして、跡形もなく消滅させてくれるだろうさ」

ルウがいやな顔になる。

「……ちよつとエディ。人をブラックホールか何かみたいに言わないでよ」

「しょうがないだろう。実際ものすごく物騒な人型兵器なんだから。だいたい、太陽を吹っ飛ばすとか言つて今さら文句を言うな。黙つてろ」

「はあい」

緊張感のかけらもない返事である。

再び男を見つめたルウの顔は笑っていた。

だが、それは腹をくくった人の笑いでもあった。

「エディの言うことは一理あるよ。ぼくはこの子がやるなど言っているから、きみたちのすることに干渉しやうしないでいるだけだ。喧嘩けんかを売る気なら買わせてもらおうよ」

「グリーンディエタを死なせてもか？」

「それを決めるのはぼくじゃないからね」

男は舌打ちして、今度はリイに話を持ちかけた。

「他の者たちはどうなる。巻き添えにする気か？」

この問いにリイは答えなかった。

代わりにレティシアが笑いながら言った。

「それこそつまんねえ脅しをするもんだ。俺たちやもともといつぱん死んでる人間だぜ」

ヴァンツァーも頷いた。

「この身体を得た時からいずれもう一度死ぬことに

なるのはわかっていた。それが今だというだけだ」

「正直、王妃さんの巻き添え食らって死ぬのはどうかと思うけどよ。ま、しょうがねえやな。俺たちや一蓮托生いちれんたくしょうってやつだからよ」

そのリイは苦しい呼吸の中から、忠実な友人を呼んだのである。

「シエラ」

「はい」

「悪いな」

「いいえ」

本気で答えたシエラだった。

自分はここで死ぬことになるらしいと思ったが、かまわなかった。どのみちこの人と命運を共にするつもりでここまで来たのだ。

分裂させるはずが却かえって結束を固めた彼らを見て、男はさらに表情を険げんしくしたが、ここで引き下がるつもりはないらしい。

気配が変わった。

同時に男の背後の宇宙空間に変化が起きた。

星も小惑星も一瞬にして消滅した。それはまるで宇宙が何もない暗闇と化したかのようだった。

「やむを得ん……。我らにとつてはおまえを確実に押さえることがもつとも重要だ。これほどの機会は次にいつあるかわからん」

ルウがやんわりと首を振る。

「もう遅い。次の機会なんか二度とない。さつさとやつておくべきだったね」

「おかしなことを言うものだ。力を封じられた今のおまえに何ができる？」

「できるよ。助けを呼ぶくらいのことほね」

「その通りだ」

新たに割り込んだ声——低く豊かに響く女の声に、シエラはぎよつとして顔を上げた。

果たしてそこには見慣れた人の姿があった。

真つ白な肌に赤い唇、上半身だけの姿で宙に浮き、黒い紗を纏い、長い黒髪を腰まで流している。

シエラは茫然と呟いていた。

「お姉さま……」

まさかここで——連邦の秘密基地の船の発着場でこの人の姿を眼にすることになるとは思わなかった。肉体を持たない女を見て、男は苛立たしげに手を振った。

「下がれ。人間ごときの出る幕ではないわ」

「さよう。我らはラー一族ではない。従って制約に縛られることもない」

「笑わせるな。貴様に何ができるといふのだ？」

「いかにも。我らは極めて微力なものだ。そちらとこの『闇』との闘いに加わるような力はない。だが、それほど侮つたものでもない。ここにいる者たちを守るくらいの芸当はできるからな」

「そうよ。そして結局残るのは、あなたがこの人を殺そうとしたという事実だけよ」

新たに割り込んだのは軽やかな少女の声だった。シエラはますます驚いて、首だけの姿で宙に浮く

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。